第1表 イネを刈ったあとの水田で，ヒレタゴボウの群生するところの組成を要約して，おもな植物のみの頻度(ローマ数字)と平均優占度(アラビア数字)を示す(1963年10月下旬)

| 物名＼場所 | 高知市福井 | | 高知市鴨田 | |
|---|---|---|---|---|
| ヒレタゴボウ | V | 3 | V | 3 |
| ヌメリグサ | V | + | V | 3 |
| ヤナギタデ | V | 2 | IV | + |
| カワラスガナ | V | 2 | II | + |
| キクモ | I | + | V | 2 |
| イヌビエ* | V | 1 | III | + |
| タマガヤツリ | V | 1 | I | + |
| ヒデリコ | II | + | V | + |
| オモダカ | IV | 2 | IV | + |
| ツルノゲイトウ | II | + | III | + |
| ミズワラビ | — | | V | 3 |
| コナギ | V | 2 | — | |
| アカウキクサ | — | | V | + |
| マツバイ | — | | V | + |
| ハリイ | — | | V | + |

* イヌビエとケイヌビエを含む。

かもしれない。いずれにしても，なおほかにも書きとめておいてよいものが少なくないが，それはまたの機会にまとめることにする。

終りに，いろいろ御教示いただいた大井次三郎博士にあつく感謝する。(高知大学教育学部生物学教室)

## 文献

久内清孝 (1950) 帰化植物 183. 村田源 (1956) 植物分類地理 **16**, 90. 大井次三郎 (1965) 改訂新版日本植物誌 174. 杉本順一 (1965) 日本草本植物総検索誌双子葉篇 370.

---

**○高等植物分布資料** (44) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (44)

**○ヤチラン** *Malaxis paludosa* Sw. 北半球亜寒帯の高層湿原に稀産する。日本では青森県の八甲田山，群馬県の尾瀬沼，栃木県の鬼怒沼と日光戦場ガ原の産地位しか知られていない。本種に1産地を加えよう。それは福島県南会津郡の浅草岳で，山頂に近い

山背に発達した湿原（約 1550 m の所）で発見された（指田豊，July 6, 1964)。此の標本は都立大牧野標本館にある。　（牧野標本館　水島正美）

**○コホタルイ** *Scirpus smithii* A. Gray subsp *leiocarpus* (Komarov) T. Koyama 1965年 8 月 26 日群馬県館林市近藤の荒廃した水田中で発見した。その付近には，タマガヤツリ，シカクイ，ヒロハイヌノヒゲ，サンカクイ等が混生していた。コホタルイの形態を観察した結果を記してみると次のようである。稈高約 60 cm，苞葉約 25 cm，茎の太さ 1 mm～2 mm，小穂の長さ 4 mm～1 cm，果実の長さ約 1.5 mm，小穂の幅約 3 mm，小穂の数 1～20 個，刺針状苞被片は実の 1.5 倍，刺針状苞被片の数 5 本，柱頭 2 本，以上であった。分布は温帯～寒帯（山梨県，青森県)北海道，朝鮮，満州で本州の分布は少ないようである。

**○ヒメアブラススキ** *Bothriochla parviflora* ohwi 1965 年 12 月 3 日群馬県館林市多々良の山林で発見する。自生地の環境はアカマツ林の道端の向陽地で，トダシバ，アブラススキとならんでかなり見られた。丈高く 1 m をこえるものが多かった。尚，筆者は，1964 年 10 月に栃木県葛生町の山林で，1965 年 9 月 24 日栃木県足利市大岩の山林で見出している。暖地性のもので群馬県南部，栃木県の東南の丘陵地帯が分布の北限地帯と思われる。分布は“武蔵野の植物”によると本州（房総半島以西の南岸)四国，九州，琉球，台湾，南中国，インドシナ，印度である。終りにのぞみ御教示いただいた桧山庫三先生に謝意を表します。　（群馬県館林市立第二中学校　松沢篤郎）

---

**中国における日本のツバキの古記録**（津山　尚）Takasi TUYAMA: Ancient records of *Camellia japonica* in the Chinese literatures

京都大学の北村四郎教授は植物分類地理 **30**: 49 (1962) で，白楽天の詩 (824 年) を引用し，詩の中の海榴は，註の中の海石榴と同じもので，日本書紀 (720年) などに出ている海石榴と同じく，日本のツバキと同じ意味であるとし，古く唐代に河南省の中原の地にツバキが栽培されていた証拠となるとの論を展開された。小生はここで日本の諸記録より早い隋代 (604～617年) に中原の地でツバキが栽培されていたことを述べたい。

海榴が海石榴と同じものであるとの証拠は，日本側の古い記録にもある。それは出雲風土記 (733 年) で，この中の諸郡の産物を記した所に椿，海石榴，海榴が散見する。特に意宇郡（オウノコオリ）の条には「海榴（或は椿に作る)」とあり，これら 3 者を互に通じてツバキの意に用いられたことが分る。これは徳川時代の考証にも出ていて，例えば屋代弘賢の古今要覧稿には，岡村尚謙の言を引用して「風土記に海榴字或作椿と見えたれば海榴は即海石榴の省呼なるはしるし」とある。万葉集をはじめ日本の他の古文献には椿，海石榴，都婆伎，都婆吉は出ているが，海榴は他に見当らぬようである。椿とツ